

佐倉孫三氏関係資料一斑（25訂稿）—日本統治下台湾警察史の一齣—
（令和4（2022）年7月13日（水）現在）

〔目 次〕

（補正経緯）	2
（追記1～6）	4
1 はじめに	6
2 『福島県史』第22巻及び『二本松市史』第9巻の件	8
3 佐倉孫三とは誰ぞ	9
（略年譜）	9
4 佐倉孫三著作抄	13
5 佐倉孫三の二松学舎入塾の件	16
6 二松学舎関係の件（含早稲田大学）	16
7 佐倉警察署次席警部時代の件	16
8 『台風雑記』及び『閩風雑記』関係	17
9 朝日新聞「閩蔵Ⅱビジュアル」掲載記事の件	18
10 兄佐倉強哉の件	19
11 その他	20

(補正経緯)

- HP 初出:
- ・平成 21 (2009) 年 10 月 2 日 (金) 初稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 10 月 4 日 (日) 改訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 10 月 9 日 (金) 二訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 10 月 24 日 (土) 三訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 3 日 (火) 四訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 11 日 (水) 五訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 14 日 (土) 六訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 16 日 (月) 七訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 20 日 (金) 八訂稿作成
 - ・平成 21 (2009) 年 11 月 26 日 (木) 九訂稿作成
 - ・平成 22 (2010) 年 2 月 1 日 (月) 十訂稿作成
(林美容氏の 2009 (平成 21) 年 10 月 22 日発表の件追加等)
 - ・平成 22 (2010) 年 3 月 14 日 (日) 十一訂稿作成
(林美容氏著書の日本語訳本の件追加、その他全体にわたり、部分的修正)
 - ・平成 22 (2010) 年 6 月 10 日 (木) 十二訂稿作成
(浜松警察署長、『台湾時報』の件追加)
 - ・平成 22 (2010) 年 10 月 31 日 (日) 十三訂稿作成
(林美容氏教示の件、朝日新聞記事等追加)
 - ・平成 22 (2010) 年 11 月 11 日 (木) 十四訂稿作成
(佐倉達山『霞城乃太刀風 二本松老少年隊の勇戦』の件修正その他)
 - ・平成 23 (2011) 年 3 月 20 日 (日) 十五訂稿作成
(林美容氏「跨文化民俗書写的角色変化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」『漢学研究』第 28 卷第 4 期 (総号第 63 号) (漢学研究中心、民国 99 (2010、平成 22) 年 12 月刊) の件追加)
 - ・平成 25 (2013) 年 10 月 9 日 (水) 十六訂稿作成
(平成 25 年 8 月 25 日 (日) 東京で開催のワークショップ「佐倉孫三の台湾原住民に関する著述とその業績に関する研究」の件追加)
 - ・平成 26 (2014) 年 8 月 31 日 (日) 十七訂稿作成
(西村一之教授「蕃務本著 (ママ、本署) 調査課と「理蕃」: 佐倉孫三を通して」『日本女子大学人間社会学部紀要』第 24 号 (平成 26 年 3 月刊) の件追加)
 - ・平成 27 (2015) 年 9 月 27 日 (日) 十八訂稿作成
(佐倉警察署次席警部時代に「押見」姓を名乗ってお

りし件追加)

- ・平成 28 (2016) 年 3 月 6 日 (日) 十九訂稿作成
(二松学舎大学関係者の関連文献を追加)
- ・平成 29 (2017) 年 9 月 25 日 (月) 二十訂稿作成
(黄美娥氏「帝国漢文的「南進」実践与「南方」観察：日人佐倉孫三的台、閩書写」に言及)
- ・平成 29 (2017) 年 12 月 13 日 (火) 二十一訂稿作成
(全体にわたって誤植補正をした。)
- ・平成 30 (2018) 年 1 月 8 日 (月) 二十二訂稿作成
(佐倉孫三・林美容 (作者)、沈佳姍 (訳者)『新編閩風雜記』(台中・五南図書公司、2017 (平成 29) 年 12 月 28 日刊) の件追加)
- ・令和 2 (2020) 年 4 月 18 日 (土) 二十三訂稿作成
(上記を佐倉孫三・林美容 (作者)、沈佳姍 (訳者)『新編閩風雜記』(台北・五南図書出版、2018 (平成 30) 年 1 月刊) で修正、その他全体微修正)
- ・令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 二十四訂稿作成
(レイアウトを全面変更し、一部補正した上で、『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録【参考篇】【附篇】一ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十五輯) 一』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) に収録した。)
- ・令和 4 (2022) 年 7 月 13 日 (水) 二十五訂稿作成
(一部補正した。)

(追記 1～6)

(追記 1) (平成 26 (2014) 年 8 月 31 日追加)

・今春西村一之教授「蕃務本著 (マ、本署) 調査課と「理蕃」: 佐倉孫三を通して」『日本女子大学人間社会学部紀要』第 24 号 (平成 26 年 3 月刊) 17～32 頁が公表され、佐倉孫三研究について大きな進展を見た。本稿は、これに基づき再検討すべきものではあるが、今はその余裕がない。取り敢えずこの旨記載しておくにとどめる。

〈 https://jwu.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_snippet&page_id=13&block_id=50&index_id=308&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese〉

・なお、仄聞するところによると、現在台湾で佐倉達山『閩風雜記』 (漢文本、福州美華書局、光緒 30 (1904、明治 37) 年刊) の註釈が始まっているとのことである。早き公刊が期待される。

⇒その後、佐倉孫三・林美容 (作者)、沈佳姍 (訳者) 『新編閩風雜記』 (台中・五南図書公司、2017 年 12 月 28 日刊) が刊行されし由 (ここのみ平成 30 (2018) 年 1 月 8 日追加、未見) 〈<http://www.books.com.tw/products/0010775614>〉

⇒その後 2018 (民国 107) 年 1 月に佐倉孫三原著、林美容編著、沈佳姍註釋『新編 閩風雜記 百年前・一位日本人的福建風俗見聞』 (台北・五南図書出版、2018 年 1 月刊) が刊行された。同書には巻頭に林美容「編者序」及び同「跨文化民俗書写的角色变化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」を収録している。沈佳姍博士の御示教に感謝いたします。(ここのみ令和 2 年 4 月 18 日追加)

(追記 2) (平成 29 (2017) 年 9 月 25 日追加)

・2017 (平成 29) 年 4 月に佐倉孫三に関する浩瀚な著作である黄美娥氏 (台湾大学台湾文学研究所) 「帝国漢文的「南進」実践与「南方」觀察: 日人佐倉孫三的台、閩書寫」『台湾文学研究学報』第 24 期 (国立台湾文学館、2017 年 4 月刊) 245～296 頁が公表された。本著作により佐倉孫三検討を全面的に見直す必要があるが、ここではそれだけを指摘するにとどめる。

「帝國漢文的「南進」實踐與「南方」觀察: 日人佐倉孫三的台、閩書寫
(Adobe PDF)

journal.nmtl.gov.tw/opencms/nmtl.../download.html?...

日人佐倉孫三的台、閩書寫. 黄美娥. 台灣大學台灣文學研究所. 摘要. 本文探討的焦點, 乃攸關於近代東亞國家中, 台灣、日本、中國之間的. 漢文學及其關係性問題。而在 面對上述狀況時, 筆者發現因為日本「南進」政. 策所致, 1895 年成為日本殖民地的」

〈 <http://www.airitilibrary.com/Publication/alDetailedMesh?docid=18172946-201704-201705260029-201705260029-245-296>〉 (ここのみ平成 29 年 12 月 3 日追加)

(追記 3) (平成 29 (2017) 年 12 月 13 日追加)

・佐倉孫三については近年日台両地のネットでの言及が極めて多く、本稿もそれらを踏ま

えて見直す必要のあることを指摘しておく。

〈 <https://zh.wikipedia.org/wiki/%E4%BD%90%E5%80%89%E5%AD%AB%E4%B8%89> 〉
〈 (維基百科: 佐倉孫三) 〉

(追記 4) (平成 30 (2018) 年 1 月 8 日追加)

・ 2017 (平成 29) 年末に佐倉孫三・林美容 (作者)、沈佳姍 (訳者) 『新編閩風雜記』 (台中・五南図書公司、2017 年 12 月 28 日刊) が刊行されし由である。

〈 <http://www.books.com.tw/products/0010775614> 〉

(追記 5) (令和 2 (2020) 年 4 月 18 日追加)

・ 2018 (民国 107) 年 1 月に佐倉孫三原著、林美容編著、沈佳姍註釋『新編 閩風雜記 百年前・一位日本人的福建風俗見聞』 (台北・五南図書出版、2018 年 1 月刊) が刊行された。但し上記 (追記 4) との関係は不詳。同書には巻頭に林美容「編者序」及び同「跨文化民俗書写的角色变化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」を収録している。沈佳姍博士の御示教に感謝いたします。

(追記 6) (令和 4 (2022) 年 4 月 1 日追加)

・ 黒羽夏彦「ふおるもさん・ぷろむなあと 台湾をめぐるあれこれ」中 2021 (令和 3) 年 11 月 25 日「【研究メモ】佐倉孫三 (達山) について」を追加した。

〈 <http://formosanpromenade.blog.jp/?p=5> 〉

・ 「国立国会図書館次世代デジタルライブラリー」で再検索の必要ありか。

〈 <https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/> 〉

1 はじめに

・昭和 48 (1973) 年 1 月 26 日台北市牯嶺街1某古書攤にて、『台湾大観』(日本合同通信社、昭和 7 年 12 月 25 日刊。その後台北・成文出版社、1985 (昭和 60) 年 3 月影印本あり。)を購う(当時購入価格新台幣 200 元)。同書中「台湾の回顧(其 1)」で、佐倉孫三及び湯目補隆両氏のことを初めて知る。

・本 HP 中別稿「佐倉孫三及び湯目補隆両氏の足跡について—領台初期の日本人関係文献—」(HP 初出:平成 22 (2010) 年 6 月 15 日(火)初稿作成)参照。

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakurayunome.pdf>〉(平成 22 年 11 月 11 日追加)

・佐倉孫三(1861~1941):領台初期の警察署長、弁務署長等、漢学者、『警士之亀鑑』、『台風雑記』等の著者

・湯目補隆(ゆのめ すけたか、1858~1936):明治中葉ヘーン大尉来日時(1895)の独逸語訳官、台湾総督府警察官及司獄官練習所の初代所長

・『台湾大観』154~159 頁:佐倉孫三「三十七年前の夢」、同書 97~104 頁:大東学人「舊[旧]雨会の人とその思ひ出」(97 頁:「漢学者で腕も立つ 佐倉孫三君 二松学舎出の漢学者である君は、腕も立つ、即ち文武両道に秀てゐた。所で督府は先ず腕の方を買つて警察官たらしめた。」)、その他:同書 140 頁(平成 21 年 11 月 3 日修正、同 11 月 12 日再修正)

・『台湾大観』169~175 頁:湯目補隆「追憶三題」

・両氏は、日本統治下台湾初期警察史及び明治警察史検討上興味ある人物。

・本稿では、佐倉孫三を取り上げる。佐倉は、長く日本統治下台湾警察史上の対象のみかと思っていたところ、平成 17 (2005) 年 11 月に、露崎栄一氏(1949~)『夫婦坂輪廻の絆 警察官の亀鑑巡查鈴木清助伝』(自己出版、平成 12 年 7 月刊)を読み、明治警察史にも関連あることを初めて知る。

・湯目補隆について詳しくは、本 HP 中別稿「湯目補隆氏関係資料一斑」参照²。

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yunome001.pdf>〉

・先年、佐倉孫三『台風雑記』(原文:漢文、東京・国光社、明治 36 年 8 月刊)の中国語訳本である林美容氏³(中央研究院民族学研究所研究員)『白話図説台風雑記:台日風俗一百年』(台湾書房出版、2007 (平成 19) 年 12 月刊)が刊行された。本稿作成に当たり、先般台湾の梁添盛博士より同書の恵投に与った。誌して深甚の謝意を表す。なお、『アジ

¹ 当時の牯嶺街は、有名な古書攤街であった。同街の古書店はその後まもなく牯嶺街から光華商場に移転したが、これらについては李志銘『半世紀旧書回味:從牯嶺街到光華商場』(群学出版有限公司、2005 (平成 17) 年 4 月刊)が興味深い。

² 本 HP 中別稿「湯目補隆氏関係資料一斑」(平成 21 年 10 月 29 日初稿作成、同 11 月 2 日改訂稿作成、同 11 月 11 日二訂稿作成、同 11 月 14 日三訂稿作成、同 11 月 23 日四訂稿作成、平成 22 年 1 月 24 日五訂稿作成、(中略)、平成 22 年 10 月 25 日九訂稿作成、以降省略)参照。(平成 21 年 11 月 3、11、14、26 日、平成 22 年 2 月 1 日、10 月 31 日一部修正)

³ (<http://www.ioe.sinica.edu.tw/chinese/staff/Lin-Mei-rong.html>) (平成 22 年 11 月 11 日追加)

ア・アフリカ言語文化研究』第71号（平成18年3月31日刊）に、林美容氏の後掲邦文関係論説が掲載されている⁴。

・林美容氏は、その後、2009（平成21）年10月22日、台湾・中興大学人文社会科学研究センター主催の成果発表会で、「跨文化民俗書写的角色变化：佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」を發表されたと仄聞する。同報告内容は活字化されたと聞くが、掲載誌等不詳。（平成22年2月1日追加）

（追記）上記については、その後、林美容「跨文化民俗書写的角色变化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」『漢学研究』第28巻第4期（総号第63号）（漢学研究中心、民国99〈2010、平成22〉年12月刊）261～294頁として公表された。（平成23年3月20日追加）

・続いて、平成21年末、上記林美容氏『白話図説台風雜記：台日風俗一百年』（台湾書房出版、2007（平成19）年12月刊）の日本語訳本である三尾裕子氏監修・台湾の自然と文化研究会編訳『台風雜記 百年前の台湾風俗』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、平成21年12月9日刊）が刊行された（山田仁史氏ブログ〈<http://buoneverita.blog89.fc2.com/blog-entry-6.html>〉参照。）。寔に貴重である。（平成22年3月14日追加）

・平成22（2010）年10月29日（金）、佐倉孫三の諸々の件につき、林美容氏、沈佳姍氏及び水口拓寿先生から、親しく御教示を頂戴した。誌して深厚の謝意を表す。なお、林氏は近く二本松市を訪われるとのことである。（平成22年10月31日追加）

・平成25（2013）年8月25日（日）午後東京で、林美容氏及び西村一之氏を中心とするワークショップ「佐倉孫三の台湾原住民に関する著述とその業績に関する研究」が開催され、両氏及び会員諸氏による佐倉の第二次台湾在勤時代の報告等がなされた。これにより、当該時代の佐倉の状況については、かなり判明した（例えば台湾総督府警務局『理蕃誌稿 第三編』（大正10年3月30日刊）184～185頁 ⇒佐倉編纂になる『治蕃紀功初集』の件〈「近代デジタルライブラリー」112齣〉参照。）。これらは、いずれ別途公表されるものと思料され、今後注視しておく要がある。なお、中央研究院台湾史研究所HPにある『台湾総督府文官職員録』のページは以下である。両氏の御示教に感謝の意を表すものである。

〈<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>〉 （平成25年8月30日追加）

・2017（平成29）年4月に佐倉孫三に関する浩瀚な著作である黄美娥氏（台湾大学台湾文学研究所）「帝国漢文的「南進」実践与「南方」觀察：日人佐倉孫三的台、閩書写」『台湾文学研究学報』第24期（国立台湾文学館、2017年4月刊）245～296頁が公表された。本著作により佐倉孫三検討を全面的に見直す必要があるが、ここではそれだけを指摘するにとどめる。（平成29年9月25日追加）

黄美娥氏：〈<http://www.gitl.ntu.edu.tw/people/bio.php?PID=13>〉

「帝國漢文的「南進」實踐與「南方」觀察：日人佐倉孫三的台、閩書寫

⁴ 林美容「宗主国の人間による植民地の風俗記録—佐倉孫三著『台風雜記』の検討—（特集）台湾における日本認識」（日文）『アジア・アフリカ言語文化研究』（Journal of Asian and African Studies）第71号（pp.169-179 2006（平成18年3月31日刊）-03-31 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）。なお、平成16年3月27日「国際ワークショップ 台湾における日本認識」参照。

〈[http://www.koryu.or.jp/08_06_01_middle.nsf/9524613d49bda42c49256784002a92a2/c620f845f053013349256e430005efbe/\\$FILE/040327.pdf#search=佐倉孫三](http://www.koryu.or.jp/08_06_01_middle.nsf/9524613d49bda42c49256784002a92a2/c620f845f053013349256e430005efbe/$FILE/040327.pdf#search=佐倉孫三)〉

（平成22年11月11日追加）。

(Adobe PDF)

journal.nmtl.gov.tw/opencms/nmtl.../download.html?...

日人佐倉孫三の台、閩書寫。黃美娥。台灣大學台灣文學研究所。摘要。本文探討的焦點，乃攸關於近代東亞國家中，台灣、日本、中國之間的。漢文學及其關係性問題。而在 面對上述狀況時，筆者發現因為日本「南進」政。策所致，1895 年成為日本殖民地的」

〈 <http://www.airitilibrary.com/Publication/alDetailedMesh?docid=18172946-201704-201705260029-201705260029-245-296>〉

(このみ平成 29 年 12 月 13 日追加)

・2017 (平成 29) 年末に佐倉孫三・林美容 (作者)、沈佳姍 (訳者)『新編閩風雜記』(台中・五南圖書公司、2017 年 12 月 28 日刊) が刊行されし由である。林美容博士、沈佳姍博士に敬意を表するものである。

〈<http://www.books.com.tw/products/0010775614>〉

なお、同サイトによれば、林美容博士、沈佳姍博士の紹介は次のとおりである。

(編著者簡介)

林美容

台灣南投縣人。臺灣大學考古人類學研究所畢業。美國加州大學爾文 (Irvine) 校區社會科學博士。現任福州外語外貿學院鄭振鐸與閩海文化研究中心研究員。

(譯者簡介)

註釋／沈佳姍 國立空中大學人文學系助理教授。

(このみ平成 30 年 1 月 8 日追加)

・2018 (平成 30) 年 1 月に佐倉孫三原著、林美容編著、沈佳姍註釋『新編 閩風雜記 百年前・一位日本人的福建風俗見聞』(台北・五南圖書出版、2018 年 1 月刊) が刊行された。但し、上記 2017 年 12 月 28 日刊のものとの関係は不詳。同書には巻頭に林美容「編者序」及び同「跨文化民俗書写的角色變化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」を収録している。沈佳姍博士の御厚情に深謝する。

(このみ令和 2 年 4 月 18 日追加)

2 『福島県史』第 22 巻及び『二本松市史』第 9 巻の件

(平成 21 年 10 月 4 日一部修正)

・『福島県史』第 22 巻 (各論編 8 人物) (福島県、昭和 47 年 2 月 29 日刊) (平成 21 年 10 月 4 日追加)

・佐倉強哉 (兄、1850~1939) : 214 頁

・佐倉孫三: 214 頁 (ただし、ここには台湾関係の記載は何故かなし。)

・『二本松市史』第 9 巻 (二本松市、平成元年 5 月 1 日刊) 第 3 編人物 14、65 頁

・佐倉家: 14 頁、佐倉強哉: 14 頁

・佐倉孫三: 65 頁 (ただし、ここには台湾関係の記載は何故かなし。)

3 佐倉孫三とは誰ぞ

・佐倉孫三『達山文稿』（達山会、昭和12年4月21日刊）は、佐倉の漢文著作を収録した文集（ただし付句点文）であるが、「自序」（巻頭）、「七十自寿序」（160～161頁）等で、かなりその生涯が辿ることができる。要検討。なお、口絵に肖像あり。

・石川梅次郎（?～2003、84歳）「二松学舎の先人たち（4）山岡鉄舟門下の逸材 天衣無縫な佐倉達山先生」『二松学舎新聞』第196号（昭和57年5月1日刊）（平成28年3月4日露崎栄一先生の御教示による。）（平成28年3月6日追加）

・横須賀司久（もりひさ、1941～）「佐倉達山」『二松学舎漢詩人列伝』（二松学舎大学中国中世文学研究室、平成元年8月18日刊）6頁（平成28年3月4日露崎栄一先生の御教示による。）（平成28年3月6日追加）

・横須賀司久（もりひさ、1941～）「佐倉達山」『漢詩人列伝』（五月書房、平成9（1997）年9月8日刊）43～64頁は、上記『達山文稿』中の一部の書下し文をも掲載。加えて、同書72、76、92、95～97、99、109、110、112、129、131、176、214、218頁は、佐倉孫三に言及するところあり。特に、「野口三山」（多内、1876～1949）⁵131頁、「清宮黔城」（1976～1936）100頁は、佐倉の福州赴任のことを記しており貴重⁶。（平成21年10月4日追加。平成21年10月9日掲載場所を「10」から「3」に変更の上、更に修正。）

・平島郡三郎（1868～1942）『二本松寺院物語』（二本松町公民館、昭和29年3月10日刊）「妙法山蓮華寺」中336、337頁に、佐倉強哉、孫三兄弟の記載あり、これにて、かなりの事が判明する。（平成22年2月1日追加）

・佐倉孫三（達山、1861～1941）：福島県二本松出身、漢学者、中国問題評論家

・雅号「達山」は故郷「安達太郎山」に由来の由（『達山文稿』巻頭の濟齋 山田準（1867～1952）⁷「佐倉達山伝」参照）。

（略年譜）

・以下、佐倉孫三『達山文稿』等に拠り、同氏の年譜の一端を示す⁸。括弧内の頁数等は、同書のもの。（平成21年10月3、9日、11月3日、14日、平成22年3月14日、平成25年10月9日（註部分）一部修正、追加）

⁵ 「野口多内君」『続対支回顧録（下）』（大日本教化図書、昭和16年刊。復刻本：原書房、昭和48年8月25日刊）380～384頁、遠藤利信「野口多内翁の生涯」『新発田郷土誌』第24号（新発田郷土研究会、平成7年12月28日刊）77～83頁（これらについては、平成21年11月中旬T氏の御高配を賜った。誌して深甚の謝意を表するものである。）

〈http://www.hikawashobo.com/product_info.php/products_id/24007〉

（平成21年10月9日追加、同11月20日追加）

⁶ 同書及び上記『続対支回顧録（下）』、「野口多内翁の生涯」によれば、二松学舎の後輩で外務省に奉職した野口多内が、明治35（1902）年4月以降外務書記生として福州領事館在勤になっており、佐倉孫三の福州招請に関与しているようであるが、詳しくはなお不明。要検討。（平成21年10月9日追加、同11月20日追加）

⁷ 〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E7%94%B0%E6%B8%88%E6%96%8E>〉

⁸ その後、平成25（2013）年現在では台湾で佐倉が大正年間の第二次台湾在勤時代に当たり台湾総督府に提出した履歴書が掛けになっていることが判明したことから、本稿の記載は再検討の要があるが、取り敢えずはこのままにしておく。（平成25年10月9日追加）

・文久元（1861）年3月18日 二本松に生れる。佐倉強哉（きょうや、1850～1939）は兄。遠祖は下総佐倉より出でしとの由（『二本松寺院物語』335頁）。（平成22年3月14日一部追加）

・明治10（1877）年12月16歳 上京、

・明治11（1878）年4月 二松学舎に入塾（39、160頁）、塾頭。陸軍士官学校を目指すも成らず（自序）、25歳千葉県警察官となり（160頁）、明治23（1890）年頃千葉県佐倉警察署次席警部。

・この時期一時「押見」姓を名乗っていたともいう（露崎栄一（1949～）『夫婦坂輪廻の絆 警察官の亀鑑巡査鈴木清助伝』〈自己出版、平成12年7月刊〉14頁注28「藤田富氏談・同氏は佐倉孫三の長男、鹿男氏の長女である。」参照。）（平成27年9月26日露崎栄一氏の御教示に感謝す。）（平成27年9月27日追加）

・その後、警視庁、司法省を経て、明治28（1895）年頃東京府各勤務（自序）。

・明治25（1892）年7月現在 東京市牛込区揚場町14番地に居住（佐倉孫三『日本尚武論』〈東京教育社、明治25年7月14日刊〉奥付）（平成21年11月3日追加）

・明治27（1894）年2月現在 東京市牛込区（町名、番地は読めず。）に居住（佐倉孫三『国之磐根（安部井翁之伝）』〈博文堂、明治27年2月2日刊〉奥付（近代デジタルライブラリー本では、奥付は何故か筆で書かれている。）（平成21年11月3日追加）

・明治28（1895）年4月 日清戦争・下関条約締結後、同年5月文官第一陣として台湾に赴任⁹、専ら警察業務に従事¹⁰、最後は鳳山県警視（明治31年2月頃鳳山県打狗警察署長¹¹）、台南県弁務署長¹²、在台三年（この時期に妻逝去）にして、明治32（1899）年春頃帰国（自序、160頁）¹³。

⁹ 佐倉孫三「三十七年前の夢」『台湾大観』（日本合同通信社、昭和7年12月25日刊。台北・成文出版社、1985（昭和60）年3月影印本あり。）154～159頁。明治29（1896）1月1日発生の芝山巖事件（学務部員6名遭難）発生後、当時台湾総督府民政局内務部警保課にいた佐倉はその後事を処理している（『史談会速記録』第382号（昭和5年2月28日刊）20～27頁参照。）。なお、同年1月6日、佐倉は、有名な佐野友三郎（1864～1920）、伊能嘉矩（1867～1925）とともに、学務部兼任になっている（下記「HP 戦前台湾学事年表」参照。）。（平成21年10月9日追加、同年11月3日修正、同年11月16日再修正）

<http://www.bl.mmtr.or.jp/~idu230/his/historyh/tasuku/kiroku/taiwann/jbw.htm>

¹⁰ 『旧植民地人事総覧 台湾編1』（日本図書センター、平成9年2月25日刊。当該年度の『職員録』（内閣官報局）から抽出したもの。）に記載の事項としては、次のものがある。（平成21年11月11日追加）

・明治29（1896）年11月1日現在 13頁 民政局内務部警保課 属四〔級〕勲七 佐倉孫三

・明治30（1897）年11月1日現在 61頁 民政局警保課 属三〔級〕勲七 佐倉孫三

・明治31（1898）年版は作成されずとの由。

（以下「佐倉孫三」の氏名なし。下記明治32年2月1日現在では、既に非職になっているようであり、掲載なし。）

¹¹ 当時鳳山県の打狗警察署長であったことは、『台湾総督府警察沿革誌 第一編警察機関の構成』（台湾総督府警務局、昭和8年12月15日刊）（附録 主要警察関係職員録）916頁に見える。（平成21年11月16日追加）

¹² 「台南県弁務署長」であったことは判明しているが、いづこの弁務署かその署名は不明。上記『台湾総督府警察沿革誌 第一編警察機関の構成』の明治31、32年中職員録でも検出できない。（平成21年11月16日追加）

¹³ 国立公文書館デジタルアーカイブ・システム「非職台南県弁務署長佐倉孫三静岡県警部ニ転任ノ件」

- ・明治 32 (1899) 年 3 月 静岡県警部 (静岡警察署長、浜松警察署長)¹⁴ (自序、160 頁)
- ・明治 33 (1900) 年 6 月 4 日 山梨県北都留郡長¹⁵ (自序、160 頁)
- ・明治 34 (1901) 年 12 月 休職¹⁶。
- ・明治 36 (1903) 年 『台風雑記』 (原文: 漢文、東京・国光社、明治 36 年 8 月刊) 刊行 (国立国会図書館近代デジタルライブラリー参照)。
- ・明治 37 (1904) 年夏 福建省 (閩) 福州武備学堂の招聘に応じて¹⁷、福州に赴き¹⁸、六年滞在。
- ・明治 37 (1904) 年 『閩風雑記』 (原文: 漢文、福州・美華書局、光緒 30 (1904、明治 37) 年刊) 刊行 (国立国会図書館近代デジタルライブラリー参照)。

(作成部局 内閣、年月日 明治 32 年 3 月 10 日)。例えば、上記佐野友三郎は、当時台北県弁務署長であったが、明治 32 (1899) 年に人員整理を目的とした文官分限令発動の対象となって休職扱いとなり、帰国しているが、佐倉孫三の場合は「已むなき事情のため、僅か三年にして辞去し、」(前掲佐倉孫三「三十七年前の夢」154、155 頁、『達山文稿』160 頁) 以上のことは、現時点では不明。(平成 21 年 10 月 9 日追加、同年 11 月 3 日修正)

¹⁴ 明治 32 (1899) 年 3 月 13 日任静岡県警部、同年 4 月 9 日～9 月 8 日第 12 代静岡警察署長兼巡査教習所長と仄聞す。なお、静岡警察署長が奏任官の警視になるのは、第 14 代笹原辰太郎署長 (当初警部、明治 34 (1901) 年 7 月任警視、高等官八等俸) からとの由 (平成 21 年 10 月 25 日追加)。さる識者の示教に拠れば、佐倉は、次いで、明治 32 (1899) 年 9 月 8 日第 11 代浜松警察署長となり、明治 33 (1900) 年 1 月 25 日離任、静岡県庁に転出しているという。佐倉の浜松署長就任の件は今回初出であるが、これは、『東京朝日新聞』明治 32 (1899) 年 9 月 19 日 (火) 朝刊第 1 面第 2 段「●自由党の選挙事務・静岡県の選挙干渉」中に、同氏が「新任浜松警察署長」とあることから判明した。ちなみに、同記事に、浜松署長前任者の永井 弘は、「先に緊急勅令曲解の廉を以て浜松警察署長より警察部保安課長兼静岡警察署長に任を命ぜられたる干渉警部永井弘氏の・・・」とあることから、この時期に県内警察主要ポストの入替があったようであるが、詳細はいずれ静岡県史を検討する必要がある。(『東京朝日新聞』記事については、朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」に拠る。「聞蔵Ⅱビジュアル」は、平成 22 (2010) 年 4 月 1 日から、「明治、大正期朝日新聞紙面データベース (DB)」が追加された。) (平成 22 年 6 月 10 日追加、同年 10 月 31 日一部補正)

¹⁵ 佐倉は、その後、時期不明であるが、おそらく属官のまま、静岡県から山梨県属に転じ、明治 33 (1900) 年 6 月 4 日同県北都留郡長 (八等) となり、奏任官になっている (『東京朝日新聞』明治 33 年 6 月 5 日 (火) 朝刊第 1 面第 6 段「叙任辞令 (4 日) 山梨県属佐倉孫三 任山梨県北都留郡長 (八等)」)。『東京朝日新聞』記事については、上記朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」に拠る。(平成 22 年 6 月 10 日追加、同年 10 月 31 日一部補正)。

¹⁶ 国立公文書館デジタルアーカイブ・システム「山梨県北都留郡長佐倉孫三休職ノ件」(作成部局 内閣、年月日 明治 34 年 12 月 16 日) (平成 21 年 10 月 9 日追加)

¹⁷ 国立公文書館デジタルアーカイブ・システム「休職山梨県北都留郡長佐倉孫三清国政府ノ招聘ニ応シ俸給ヲ受クルノ件」(作成部局 内閣、年月日 明治 35 [ママ] 年 10 月 21 日 内容詳細 「休職山梨県北都留郡長佐倉孫三 右清国福州武備学堂の招聘に応し俸給を受くる件裁可被為在度 [あらせられたく] 謹て奏す」 明治 36 [ママ] 年 10 月 16 日 内務大臣伯爵桂太郎) (平成 21 年 10 月 9 日追加、同年 11 月 3 日修正)

¹⁸ 佐倉孫三『時務新論』(福州美華書局、明治 38 年 3 月刊) 自序に「昨夏不測応学堂招聘」とあることより、福州赴任は、明治 37 (1904) 年夏と考えられる。ただ、これであると、「福州滞在六年」と実質年数で合わないが、年数通算で六年とも思われるので、取りあえずはこうしておく。なお、一部の解説書では、何故か「八年」とするものもあるが、これはいささか疑問であり、その後の台湾再勤務の歳月をも含めたものかとも思われる。

・明治 38 (1905) 年 『時務新論 (漢文本)』 (原文: 漢文、福州・美華書局、光緒 31 (1905、明治 38) 年刊) 刊行 (国立国会図書館近代デジタルライブラリー参照)。(平成 21 年 11 月 3 日追加)

・この間、福建省警務学堂等で教える (自序、160、310 頁。明治 39 (1906、光緒丙午) 「光緒丙午閩省創興警学」、「聘師主講席」、303 頁。『時務新論』自序)。

・明治 42 (1909、宣統元歳次己酉) 年 3 月頃 全閩高等巡警学堂離任、帰国 (303~307 頁)。

・その後、再度台湾にて理蕃業務に従事、三年を過ごす (160 頁)、明治 43 (1910、庚戌) 年には在台を確認 (227 頁等)。

(追記 1) 平成 25 (2013) 年 8 月 25 日 (日) 午後東京で、林美容氏及び西村一之氏を中心とするワークショップ「佐倉孫三の台湾原住民に関する著述とその業績に関する研究」が開催され、両氏及び会員諸氏による佐倉の第二次台湾在勤時代の報告等がなされた。これにより、当該時代の佐倉の状況については、かなり判明した。これらは、いずれ別途公表されるものと思料され、今後注視しておく要がある。なお、中央研究院台湾史研究所 HP にある『台湾総督府文官職員録』のページは以下である。両氏の御示教に感謝の意を表するものである。(<<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>> (平成 25 年 8 月 30 日追加)

(追記 2) 上記 (追記 1) 記載関係で、翌平成 26 年 3 月に西村一之「蕃務本著 (ママ、本署) 調査課と「理蕃」: 佐倉孫三を通して」『日本女子大学人間社会学部紀要』第 24 号 (平成 26 年 3 月刊) 17~32 頁が公表された。佐倉孫三研究上貴重な論稿である。

(<https://jwu.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=308&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese&page_id=13&block_id=50> (平成 26 年 8 月 31 日追加)

・帰京後、小石川大塚 (礪川、110、117、160 頁。東京市小石川区大塚窪町 24 番地 (奥付)) に住み、早稲田実業学校 (大正 4 (1915) 年確認、113、114 頁)、独逸協会学校、母校二松学舎等で教える (自序、160 頁)。昭和 3 (1928) 年 4 月 二松学舎専門学校発足、専任教授 (担当: 小学・漢文新選・漢作文・漢詩) となる。中国問題評論家としても著名。うち、福州の六年については、前掲『達山文稿』163~227、256~265、310 頁中で、かなり把握可能¹⁹。

・昭和 16 (1941) 年 2 月 15 日 逝去²⁰。

・いずれにせよ、佐倉孫三関係の伝記的著作の出現が待たれる。

・菩提寺: 二本松・蓮華寺²¹

¹⁹ 福州では、福建省武備学堂、中学堂、警務学堂等への関与だけで、所謂台湾籍民対策 (例えば福州東文学堂) とかの絡み等については、赴任年月から見て関係なし。例えば、中村孝志「東亜書院と東文学堂—台湾総督府華南教育施設の濫觴—」『天理大学学報』第 124 輯 (昭和 55 年 3 月 20 日刊) 1~18 頁、同「福州東瀛学堂と厦門旭瀛書院—台湾総督府華南教育施設の開始—」同第 128 輯 (昭和 55 年 9 月 20 日刊) 1~19 頁、同編『日本の南方関与と台湾』(天理教道友社、昭和 63 年 2 月 20 日刊) 等には、佐倉の記述はなし。

²⁰ 「ヨミダス歴史館」(明治・大正・昭和の読売新聞記事紙面) 昭和 16 (1941) 年 2 月 18 日 (火) 朝刊第 3 面 (3/4 頁) 「訃報 佐倉孫三氏」(平成 22 年 10 月 31 日追加)

²¹ 前掲平島郡三郎 (1868~1942) 『二本松寺院物語』(二本松町公民館、昭和 29 年 3 月 10 日刊) 「妙法

平島郡三郎（1868～1942）『二本松寺院物語』（二本松町公民館、昭和 29 年 3 月 10 日刊）
「妙法山蓮華寺」中 336、337 頁
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~j-nosuke/05kankou/03jiin/kank_jiin.html>

4 佐倉孫三著作抄

（邦文回顧文献）（平成 21 年 11 月 16 日追加、同 11 月 26 日、同 22 年 3 月 14 日修正）
・「明治廿九年一月一日台湾八芝蘭に於て学務官僚遭難」『史談会速記録』第 382 号（昭和 5 年 2 月 28 日刊）20～27 頁（『史談会速記録 合本 43』（原書房、昭和 50 年 3 月 5 日刊）590～597 頁。上記『史談会速記録』第 382 号には、最初に、後藤松吉郎（1849～1939）「明治廿九年一月一日台湾八芝蘭に於て学務官僚遭難」（13～19 頁、合本 583～589 頁）なる導入的なものがあり、それを承けて、上記佐倉孫三のものが掲載されている。ただし、同号「目次」に拠れば、佐倉のものは、「同事件を目撃したる実況」とある。なお、後藤松吉郎は、当時の著名な督府幹部〈台湾総督府開設時では内務部庶務課長〉である²²。追って検討予定でいる。）

（芝山巖事件）：

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%AD%E6%B0%8F%E5%85%88%E7%94%9F>>

- ・「三十七年前の夢」『台湾大観』（日本合同通信社、昭和 7 年 12 月 25 日刊（平成 22 年 2 月 25 日奥付判明につき追加。T 氏に感謝。）。台北・成文出版社、1985（昭和 60）年 3 月影印本あり。）154～159 頁
- ・「追憶漫談」『二松学舎六十年史要』（二松学舎、昭和 12 年 12 月 15 日刊）189～192 頁（二松学舎在舎時の回顧録）

（佐倉孫三（達山）名義、国会図書館所蔵本 うち、*：国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵本）

- ・* 警士之亀鑑 / 佐倉孫三 -- 知新堂, 明 24.12.3
- ・* 日本尚武論 / 佐倉孫三（達山） -- 東京教育社, 明 25.7.14
- ・山岡鉄舟伝 / 佐倉孫三 -- 普及舎, 明 26.5（山岡鉄舟: 1836～1888）
- ・* 国之磐根（安部井翁之伝） / 佐倉孫三 -- 博文堂, 明 27.2.2（安部井磐根: 1832～1916）
- ・* 台風雑記（漢文本）²³ / 佐倉孫三 -- 国光社, 明 36.8（和装、袋綴）

山蓮華寺」中 336、337 頁参照。（平成 22 年 2 月 1 日追加）

²² 後藤松吉郎「文官最初の台湾入り」『台湾大観』（日本合同通信社、昭和 7 年刊（奥付不明）。台北・成文出版社、1985（昭和 60）年 3 月影印本あり。）135～154 頁参照。なお、本 HP 別稿「後藤松吉郎とは誰ぞ」（平成 22 年 5 月 25 日初稿作成、同年 6 月 19 日五訂稿作成）<<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatvoshi/goto001.pdf>> 参照。（平成 21 年 11 月 26 日追加、同年 10 月 31 日一部補正）

²³ 林美容『白話図説台風雑記：台日風俗一百年』（台湾書房出版、2007（平成 19）年 12 月刊）『アジア・アフリカ言語文化研究』第 71 号（平成 18 年 3 月 31 日刊）参照。

- ・*閩風雜記（漢文本）²⁴ / 佐倉達山 -- 福州美華書局, 光緒 30（1904、明治 37）
（扉に、「光緒三十年歲次甲辰 閩風雜記 福州美華書局活板」とある。同書は、前掲『達山文稿』に、収載経緯の記述はないものの、163～216 頁に収録されている。未検討ではあるが、再録と見られる。なお、近代デジタルライブラリーでは、「佐倉孫三」ではなく、「佐倉達山」で検索のこと。）（平成 21 年 10 月 4 日追加、同年 10 月 24 日修正、同年 11 月 3 日再修正）
- ・*時務新論（漢文本） / 佐倉孫三（達山） - 福州美華書局, 明 38.3
（扉に、「大清光緒三十一年時務新論 福州美華書局活板」とある。同書は、前掲『達山文稿』に、収載経緯の記述はないもののかかなり収録されている。未検討ではあるが、再録と見られる。）（平成 21 年 11 月 3 日修正）
- ・*遊黄檗山記（漢文本） / 佐倉孫三 -- [?], [?]（「在清国 佐倉孫三稿」とある。前掲『達山文稿』にも収録されている。）
- ・壮烈美譚鈴木巡查 / 佐倉孫三 -- 日東之華社, 昭和 4
- ・達山文稿（漢文本） / 佐倉孫三 -- 達山会, 昭 12.4
- ・二本松少年隊秘話 / 佐藤利雄 -- 霞ヶ関書房, 昭和 16
（内容: 榊山潤「二本松少年隊記」、佐倉孫三「二本松少年隊の勇戦」等）
- ・台風雜記（漢文本） / 佐倉孫三 -- 台湾銀行, 1961（昭和 36）.5・（台湾文献叢刊;第 107 種）

（その他）

- ・佐倉孫三・達山『甲州遊覧—中央線案内』（奈良檉塢、明治 35（1902）年刊。未見。）
（「甲州文庫 HP」に拠る。未見。）（平成 21 年 11 月 14 日追加）
<<http://www.lib.pref.yamanashi.jp/kosyu/kyozai/syozo/tetudoten.htm>>
- ・佐倉孫三「題藤園將軍照像背面」『児玉藤園將軍』（児玉源太郎大将十三回忌記念出版物。拓殖新報社、大正 7 年 8 月 25 日刊）前輯 134 頁（『達山文稿』244～245 頁に再録、ただし、表題は「題藤園將軍照像背」）（平成 21 年 11 月 14 日追加）
- ・佐倉達山『武士かたぎ』（日東之華社、大正 15（1926）年 7 月刊。 34p, 図版 4 枚 ; 23cm 件名: 佐倉, 強哉）（nacsis webcat に拠る。未見。）（平成 21 年 11 月 3 日追加）
- ・『佐倉達山編纂模範漢文新選』（東京 松雲堂書店, 昭和 3（1928）年 6 月刊。 4, 3, 50, 42p ; 23cm 注記: 標題紙の表示: 静修書院出版）（nacsis webcat に拠る。未見。）
- ・佐倉達山『霞城乃太刀風 二本松老少年隊の勇戦』（緒言: 佐倉強哉、牛込区・日東之華社、昭和 3（1928）年 9 月 15 日刊、50 銭）（復刻版: 『霞城乃太刀風 二本松老少年隊の勇戦』（発行者: 二本松歴史研究会調査・資料委員 相原秀郎、発行支援: 二本松市本町二

²⁴ 平成 29（2017）年末に佐倉孫三・林美容（作者）、沈佳姍（訳者）『新編閩風雜記』（台中・五南図書公司、2017（平成 29）年 12 月 28 日刊）が刊行されし由である。（平成 30（2018）年 1 月 8 日追加、未見）<<http://www.books.com.tw/products/0010775614>> ⇒2018（平成 30）年 1 月に佐倉孫三原著、林美容編著、沈佳姍註釋『新編 閩風雜記 百年前・一位日本人的福建風俗見聞』（台北・五南図書出版、2018 年 1 月刊）が刊行された。但し、上記「2017 年 12 月 28 日刊」のものとの関係は不詳。同書には巻頭に林美容「編者序」及び同「跨文化民俗書写的角色变化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」を収録している。（令和 2 年 4 月 18 日追加）

丁目・本田書店、昭和 63 (1988) 年 7 月 29 日刊)。巻末に「『霞城乃太刀風』復刻版刊行にあたって あとがき」あり。下記サイト参照。) (平成 21 年 10 月 4 日追加、平成 22 年 3 月 14 日修正、復刻版閲覧により同年 11 月 11 日修正)

〈<http://aidu.s293.xrea.com/modules/myalbum2/photo.php?lid=198&cid=4>〉

〈http://snowmoon.org/ho_kasumi.htm〉

(参考) (平成 22 年 11 月 11 日追加)

HP「二本松少年隊の悲劇」: 〈<http://plaza.rakuten.co.jp/wawanko/57025>〉

・佐倉孫三(達山)『徳川の三舟』(康文社、昭和 10 (1935) 年 12 月刊。未見。)(早稲田大学中央図書館所蔵、HP「スーパー源氏」: 久留米市福太郎書店出品、売価¥18,000)
(平成 21 年 11 月 14 日追加)

・佐倉孫三編『談藪』(漢文本、人物論)(佐倉孫三(発行所: 東京 達山会)、昭和 13 (1938) 年 9 月 20 日刊)(nacsis webcat に拠る。これについては、平成 21 年 11 月下旬 T 氏の御配慮を忝うした。誌して深甚の謝意を表するものである。)
(平成 21 年 11 月 3 日追加、同 11 月 26 日修正)

・佐倉孫三[撰]「天野爲之先生頌徳之碑」形態 1 軸 拓本 軸装; 114cm 注記 206.8×95.4cm
(外寸 288.6×113.5cm) 書: 西尾東崖 題字: 小笠原長生 件名 天野為之, 1859-1938 昭和 16 (1941) 年 2 月 所在: 多磨霊園(東京都府中市)(早稲田大学中央図書館所蔵。未見。)
(平成 21 年 11 月 13 日追加)

*『台湾時報』掲載分(再来台中のものか?。要確認)(平成 22 年 6 月 10 日追加)

・佐倉孫三は、明治 42 (1909、宣統元歳次己酉) 年 3 月頃に福州の全閩高等巡警学堂を離任、帰国し、その後、再度台湾にて理蕃業務に従事、三年を過ごしているというが、その時期の足跡は、不明な点が多い。以下のものは、おそらく、その頃のものと推測される。(平成 22 年 6 月 10 日追加、同年 10 月 31 日一部補正)

(参考) 中島利郎(1947~)編『『台湾時報』総目録』(緑蔭書房、平成 9 年 2 月 15 日刊)

〈<http://www.amazon.co.jp/%E3%80%8E%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E6%99%82%E5%A0%B1%E3%80%8F%E7%B7%8F%E7%9B%AE%E9%8C%B2%E2%80%95%E8%91%97%E8%80%85%E5%90%8D%E7%B4%A2%E5%BC%95%E4%BB%98-%E4%B8%AD%E5%B3%B6-%E5%88%A9%E9%83%8E/dp/4897740177>〉

・佐倉孫三「(文林) 所憩園観梅記」『台湾時報』第 27 号(明治 44 (1911) 年 11 月 20 日刊) 76 頁(『『台湾時報』総目録』30 頁に拠る。)

・佐倉達山「(支那事情) 福建に於ける革命軍の動機」『台湾時報』第 29 号(明治 45 年 1 月 20 日刊) 21 頁(『『台湾時報』総目録』32 頁に拠る。)

・佐倉達山「(文林) 輟耕廬記」『台湾時報』第 30 号(明治 45 年 2 月 28 日刊) 77 頁(『『台湾時報』総目録』34 頁に拠る。)

・佐倉達山「文林 遊玉尺山房記」『台湾時報』第 31 号(明治 45 年 3 月 30 日刊) 71 頁(『『台湾時報』総目録』34 頁に拠る。)

・佐倉達山「(文林) 紀漆崎大尉従卒市川為市事」『台湾時報』第 39 号(大正元年 12

月 20 日刊) 41 頁 (『『台湾時報』総目録』 34 頁に拠る。)

5 佐倉孫三の二松学舎入塾の件

・上記佐倉孫三「追憶漫談」『二松学舎六十年史要』(二松学舎、昭和 12 年 12 月 15 日刊、189~192 頁)によれば、「明治 10 [1877] 年 2 月西南戦争勃発、兄佐倉強哉同年警視庁抜刀隊として出征、鎮定後警視庁に奉職、郷里の家族を東京に呼び寄せる、佐倉孫三明治 10 [1877] 年 12 月上京、明治 11 [1878] 年 4 月二松学舎に入門、三島中洲 [毅、1830~1919] の教えを受ける」(要約)とある。また、佐倉強哉につき、前掲『福島県史』第 22 巻(各論編 8 人物) 214 頁及び『二本松市史』第 9 巻第 3 編 14 頁では、「維新後福島県雇から明治 10 年警視庁警部補となって西南戦争に従軍。」とある。これらの記述は、下記榊山潤「田舎武士の目」関係記載のものとは、年代その他一部に相違があるが、佐倉孫三の著作「追憶漫談」記載が正しいのではないと思われる。

6 二松学舎関係の件(含早稲田大学)

- ・『二松学舎六十年史要』(二松学舎、昭和 12 年 12 月 15 日刊) 189~192 頁(佐倉孫三「追憶漫談」)
- ・『二松学舎百年史』(二松学舎、昭和 53 年 10 月 10 日刊) 478、509、524、537 頁(昭和 3 (1928) 年 4 月 二松学舎専門学校発足、佐倉孫三 専任教授〈小学・漢文新選・漢作文・漢詩〉)
- ・『二松学舎百十年史』(二松学舎、昭和 62 年 10 月 10 日刊) 45(佐倉孫三発涉沢榮一宛書簡)、65(集合写真中に佐倉孫三あり。)、66(佐倉孫三肖像)、77 頁
- ・『明治 10 年からの大学ノート 二松学舎 130 年のあゆみ』(三五館、平成 19 年 10 月 10 日刊) 口絵(集合写真中に佐倉孫三あり、上記『二松学舎百十年史』中のものと同じ。)、204 頁
- ・その他: 『早稲田大学百年史』第 2 巻 1192 頁(一時期、早稲田大学でも講師在任)

7 佐倉警察署次席警部時代の件

- ・明治 23 (1890) 年 4 月鈴木清助巡查(1860~1890) 殉職事件の関係者として有名
- ・HP「夫婦坂輪廻の絆」(当時佐倉孫三は佐倉警察署次席警部)
<<http://johokan.net/history/tradition/meotozaka.html>>
- ・「千葉県巡查鈴木清助殉職碑」
<http://www.geocities.jp/chiba_bunka/suzuki.html>
<<http://www.geocities.jp/maruiso4219/page020.html>>
- ・佐倉孫三『警士之亀鑑』(東京・知新堂、明治 24 年 12 月 3 日刊)(近代デジタルライブラリー⇒国会図書館デジタルコレクション所蔵)
- ・佐倉孫三『壮烈美譚鈴木巡查』(日東之華社、昭和 4 年刊)(未見)(平成 22 年 3 月

14日追加)

- ・佐倉孫三「巡查鈴木清助君遭難碑」『達山文稿』（達山会、昭和12年4月21日刊）33～34頁
- ・『千葉県警察史』第1巻（千葉県警察本部、昭和53年3月31日刊）725～729頁
- ・露崎栄一（1949～）『夫婦坂輪廻の絆 警察官の亀鑑巡查鈴木清助伝』（自己出版、平成12年7月刊）〈<http://www.bk1.jp/product/1936702>〉（本URLは平成27年9月27日現在では無効か。）

8 『台風雑記』及び『閩風雑記』関係（平成30年1月8日「8 『台風雑記』関係」を改題）

・明治36（1903）年『台風雑記』（原文：漢文、国光社、明治36年8月刊）刊行（上記国立国会図書館所蔵本、同館近代デジタルライブラリー所蔵本参照。）

・佐倉孫三『達山文稿』（達山会、昭和12年4月21日刊）163～216頁は、『台風雑記』の姉妹本ともいふべき佐倉達山著『閩風雑記』（福州 美華書局、光緒30（1904、明治37）年刊。扉に、「光緒三十年歳次甲辰 福州 美華書局活板」とある。）を再録しているが、その転載経緯等の記述はない。最初に、爵南生、達山識「閩風雑記序」（甲辰初夏〈明治37、1904年〉）を載せ（163～164頁）、福建、福州のことを記載している。（平成21年10月4日、同11月3日一部修正）。

・（nacsis wecat 記載）台北・台湾銀行経済研究室編輯『台風雑記』（台湾文献叢刊第107種、台湾銀行、1961.5）（平成22年2月1日追加）

・（nacsis wecat 記載）『台游日記』 / 蔣師轍 [著] . 台湾遊記 / 諸家 [編] . 台湾游日記 / 諸家[編] . 台風雑記 / 佐倉孫三[撰] (台北 : 大通書局, 1987.10 1冊 ; 22cm. -- (台湾文献史料叢刊 ; 177 . 第9輯) 注記: 合訂本 別タイトル: 台湾旅行記 著者標目: 蔣, 師轍 (1846? ~1904) <jiang, shi zhe> ; 諸家; 佐倉孫三 (平成21年11月3日追加)

・林美容「宗主国の人間による植民地の風俗記録—佐倉孫三著『台風雑記』の検討—（〈特集〉台湾における日本認識）」（日文）『アジア・アフリカ言語文化研究』（Journal of Asian and African Studies）第71号（pp.169-179 2006〈平成18年3月31日刊〉-03-31 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/120000997414/>〉〈<http://repository.tufts.ac.jp/handle/10108/20235>〉

・HP「林美容教授（中央研究院民族学研究所研究員）個人簡歴」

〈<http://www.ntpu.edu.tw/gif/teacher/teacher6-1.html>〉

〈<http://www.ioe.sinica.edu.tw/chinese/staff/Lin-Mei-rong.html>〉

・林美容『白話図説台風雑記：台日風俗一百年』（台湾書房出版、2007〈平成19〉年11月27日刊）

〈<http://www.books.com.tw/exep/prod/booksfile.php?item=0010389525>〉

・林美容「跨文化民俗書写的角色変化：佐倉孫三《閩風雑記》与《台風雑記》的比較」（2009（平成21）年10月22日台湾・中興大学人文社会科学研究中心主催の成果発表会での報

告を活字化したもの。掲載誌不詳。) (平成 22 年 2 月 1 日追加)

(追記) 上記については、その後、林美容「跨文化民俗書写的角色变化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」『漢学研究』第 28 卷第 4 期(総号第 63 号)(漢学研究中心、民国 99(2010、平成 22)年 12 月刊)261~294 頁として公表された。(平成 23 年 3 月 20 日追加)

・平成 21 年末、上記林美容『白話図説台風雜記: 台日風俗一百年』(台湾書房出版、2007(平成 19)年 12 月刊)の日本語訳本である三尾裕子監修・台湾の自然と文化研究会編訳『台風雜記 百年前の台湾風俗』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、平成 21 年 12 月 9 日刊)が刊行された(山田仁史氏ブログ〈<http://buoneverita.blog89.fc2.com/blog-entry-6.html>〉参照。)(平成 22 年 3 月 14 日追加)

・2017(平成 29)年末に佐倉孫三・林美容(作者)、沈佳姍(訳者)『新編閩風雜記』(台中・五南圖書公司、2017 年 12 月 28 日刊)が刊行されし由である。林美容博士、沈佳姍博士に重ねて敬意を表するものである。(平成 30 年 1 月 8 日追加)

〈<http://www.books.com.tw/products/0010775614>〉

・2018(平成 30)年 1 月に佐倉孫三原著、林美容編著、沈佳姍註釋『新編 閩風雜記 百年前・一位日本人的福建風俗見聞』(台北・五南圖書出版、2018 年 1 月刊)が刊行された。但し、上記「2017 年 12 月 28 日刊」のものとの関係は不詳。同書には巻頭に林美容「編者序」及び同上記「跨文化民俗書写的角色变化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」を収録している。沈佳姍博士の御示教に拠る。厚く御礼申し上げます。(令和 2 年 4 月 18 日追加)

9 朝日新聞「閩蔵Ⅱビジュアル」掲載記事の件(平成 22 年 10 月 31 日追加)

・朝日新聞「閩蔵Ⅱビジュアル」は、平成 22(2010)年 4 月 1 日から、「明治、大正期朝日新聞紙面データベース(DB)」が追加された²⁵。佐倉孫三関係については、下記の五件が掲載されている。

① 明治 26(1893)年 6 月 15 日(?)『東京朝日新聞』朝刊、6 頁「(広告)佐倉孫三君編『山岡鉄舟伝』(全一冊、定価十八銭、不要郵税)普及舎主 辻太」

② 明治 32(1899)年 9 月 19 日(火)『東京朝日新聞』朝刊、1 頁 2 段「●自由党の選挙事務・静岡県の選挙干渉」⇒この時期佐倉が浜松警察署長であることが判明する。

③ 明治 33(1900)年 6 月 5 日(火)『東京朝日新聞』朝刊、1 頁 6 段「叙位辞令(4 日)」⇒佐倉が山梨県北都留郡長になったことが判明する。

④ 明治 35(1902)年 7 月 8 日(?)『東京朝日新聞』朝刊、3 頁 2 段「三門の吳汝綸氏招宴」⇒三門とは「三島侍従侍講[中洲、1831~1919]始め二松学舎出身者八十余人」、

²⁵「閩蔵Ⅱビジュアル」はその後全面リニューアル(令和 4(2022)年 4 月 1 日)されている。

〈<http://www.asahi.com/information/db/2022renewal/>〉(令和 4(2022)年 7 月 13 日追加)

「朝日新聞社では、2022 年春に記事データベース「閩蔵Ⅱビジュアル」を全面リニューアルしました。IT 環境の進化に合わせ、使いやすい画面デザインと新機能を取り入れました。また、サービス名称も閩蔵から「朝日新聞クロスサーチ」に変更し、新しいデータベースとして生まれ変わりました。」

吳汝綸（1840～1903）：明治 35 年日本の教育制度視察のため訪日。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%91%89%E6%B1%9D%E7%B6%B8>〉

⑤ 昭和 8（1933）年 5 月 16 日（火）『東京朝日新聞』朝刊、7 頁 8 段「ラヂオ けふの放送番組 午後 6 時 25 分 趣味講座 次郎長の面目躍如 山岡鉄舟を感動させた意気 二松学舎教授 佐倉孫三」（山岡鉄舟：1836～1888、清水次郎長：1820～1893）

10 兄佐倉強哉の件

・佐倉強哉（きょうや、帯刀、1850（嘉永 3 年 8 月 6 日）～1939（昭和 14 年）.11.14）

・『福島人名辞典』（時事通信社、大正 3 年 9 月 5 日刊）（さノ部 17 頁）

「●佐倉強哉君 吾ば（ママ）弁護士なり、福島県士族佐倉源五右衛門氏の長男にして、嘉永 3 [1850] 年 8 月 6 日を以て生る、夙に官界に身を投じ、福島県庁に出仕す、後司法省に転じ、明治 20 [1887] 年判検事登用試験に及第して判事となる、爾来奈良、金沢地方裁判所部長に補せられ、34 [1901] 年甲府地方裁判所検事正に任ぜられ、更に根室地方裁判所検事正に転じ、後再転して盛岡地方裁判所検事正となり名判官の称を博せしが、43 [1910] 年官界を辞して〔最後は大審院検事。その後、岩手県保護院長でかわら弁護士開業。〕〔明治 45 年 6 月〕福島市に弁護士を開業し、一般法律事務を取扱ひつゝあり、在官中従四位勲四等に叙せられる、夫人を八重子と呼ぶ。（福島市宮ノ下 1）」

・平島郡三郎（1868～1942）『二本松寺院物語』（二本松町公民館、昭和 29 年 3 月 10 日刊）「妙法山蓮華寺」中 336 頁参照。（平成 22 年 2 月 1 日追加）

・菩提寺：二本松・蓮華寺

・竹花孝司「佐倉強哉」『福島県民百科』（福島民友新聞社、昭和 55 年 5 月 20 日刊）391 頁（平成 22 年 3 月 14 日追加）

・佐倉強哉は、小説家榊山潤（1900.11.21～1980.9.9）の義父（妻雪が佐倉強哉の長女、昭和 7（1932）年 4 月結婚）。

・榊山潤『歴史』（昭和 13 年発表）：二本松落城を扱った長編歴史小説、主人公片倉新一郎は佐倉強哉がモデル。

・〈http://fine-vn.com/cat_24/ent_52.html〉

〈<http://kikoubon.com/sakakiyama.html>〉

・榊山潤『歴史』三部作の最初は、昭和 13（1938）年 7、10 月の『新潮』誌上に発表の「慶応四年」、「歴史」⇒昭和 15 年 3 月 5 日第 3 回新潮文芸賞受賞 ⇒多くの版本あり。⇒新しいものでは、榊山潤『歴史—二本松藩士の維新—』（時代小説文庫、富士見書房、平成 2 年 1 月 10 日刊。尾崎秀樹（1928～1999）「解説」）、同『続 歴史—福島事件の悲劇—』（時代小説文庫、富士見書房、平成 2 年 5 月 30 日刊。）参照。

・映画化『歴史』（第 1～3 部）昭和 15 年 2 月（日活、内田吐夢監督、小杉勇主演）

・榊山潤『歴史—みちのく二本松落城—』（叢文社、昭和 58 年 1 月 1 日刊）（内容：「歴史—みちのく二本松落城—」に加え、「佐倉強哉の手記」、榊山潤「田舎武士の目」、榊山雪「あとがきにかえて 父、佐倉強哉」あり。）

・榊山雪（1910.1.3～1993.1.11、83 歳）『佐倉強哉』（叢文社、昭和 63 年 10 月 30 日

刊。未見。福島県立図書館には所蔵ありとの由（88頁、図版、21cm）

・小田淳（1930～）『歴史作家榊山潤—その人と作品』（叢文社、平成14年8月1日刊）
30～32、42～48頁

・前掲榊山潤「田舎武士の目」等によれば、「佐倉強哉は、二本松藩士、二本松十万石霞ヶ城落城（二本松少年隊の悲劇）、二本松県廃止後、家族とともに上京、月給7円50銭の邏卒（明治8年巡査に改称）生活、うちの4円をさいて、弟（佐倉孫三）を二松学舎の寮に入れた。明治10（1877）年西南戦争には警部補で出征、平定後百円公債1枚で放り出される、横浜裁判所の見習書記に就職、司法官として三十年、横浜、広島、奈良、金沢、甲府、根室と転勤、大審院検事、退官後は、弁護士、公証人として三十年。」（要約）とあるが、廃藩後西南戦争前後の時間的経緯等については、上記佐倉孫三の回想とか『福島人名辞典』の内容と一致しない。ここでは、佐倉孫三の回想及び『福島人名辞典』の方をとっておく。

・「30年武士として生き、次の30年司法官、残りの30年は弁護士・公証人として生活」（HP「タッチャンの散歩」

〈<http://blogs.yahoo.co.jp/tatsuya11147/26774603.html>〉

11 その他

・HP「日本漢文小説研究会」（平成20年12月21日報告の詳細不詳）

〈<http://bungakubu.kokushikan.ac.jp/tyugokubungaku/kanbunshosetu.html>〉（月例研究会記録）平成20（2008）年（中略）・10月5日 川邊雄大「明治期の上海における邦人の活動について—『滬游雑記』と東本願寺上海別院における日中文化交流を例として」・12月21日 国際学術討論会「異時空下的同文詩寫—台湾古典詩與東亞的交錯」（参加報告）・巖明、川邊雄大「明治時代的二松學舎和台湾—以佐倉孫三爲中心」

・（新刊紹介）後藤武秀『台湾法の歴史と思想』（法律文化社、平成21年9月20日刊）

〈<http://www.hou-bun.co.jp/cgi-bin/search/detail.cgi?c=ISBN978-4-589-03179-2>〉

・（新刊紹介）西英昭（1974～）『『台湾私法』の成立過程 テキストの層位学的分析を中心に』（九州大学出版会、平成21年10月15日刊）（平成21年10月20日追加）

〈<http://kup.or.jp/booklist/ss/politics/999.html>〉

・黒羽夏彦「ものろぎや・そりてえる」

〈<http://barbare.cocolog-nifty.com/>〉

「ふおるもさん・ぷろむなあと 台湾をめぐるあれこれ」

2021（令和3）年11月25日「【研究メモ】佐倉孫三（達山）について」

〈<http://formosanpromenade.blog.jp/?p=5>〉（令和4（2022）年4月1日追加）

（了）